

秋田県立大学「人類の持続可能な発展に資する科学技術」
「苗」研究のエントリーシート

研究テーマ	学習者の弱点を集中的に個別矯正するリスニングプログラムの開発		
研究代表者	岡崎 弘信	役職	准教授
フリガナ	オカザキ ヒロノブ	学位	文学修士
学科等	総合科学教育研究センター	Eメール	okazaki@akita-pu.ac.jp
主な共同研究者(学内)	なし		
主な共同研究者(学外)	新田晴彦（専修大学）、木戸和彦（環太平洋大学）、橋本信一（創価大学）		

研究の内容

日本人英語学習者の大きな弱点のひとつは、ネイティブ・スピーカー同士が話す簡単な日常会話さえ正確に聞き取れないことである。彼らは、なんとなく聞こえてきた単語と文脈から内容を理解しようとするトップダウンアプローチに頼る割合が多く、しばしば的外れな答え方をしてしまう。

図1は、われわれが3大学270人を対象に調査したもので、棒グラフは、既知の単語（中学校レベル）をネイティブ・スピーカーがナチュラルに話した場合、どれだけ聞き取れるかを示しており、折れ線グラフはどれくらい推測しようとしたのかを示している(Okazaki & Nitta 2005)。

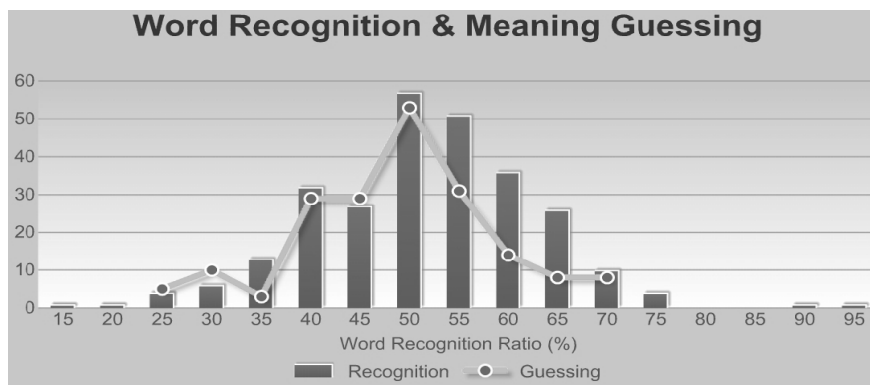


図1 リスニングにおける単語認識率と推測率

このグラフから、既知の単語であっても、多くの学生が総単語数の40～65%くらいまでしか聞こえていないことが見て取れる。そして、このレベルの学生の推測率が、他のレベルの学生よりも格段に高くなる傾向にある。「文字で示されたら即座に理解できた」というのは、しばしば耳にする話であるが、標準的な大学生レベルでさえ現実に起こり得るということを、図1は数値で表しているのである。

このような推測に頼らざるを得ない事態を極力避けるには、言語知識から内容を理解するボトムアップアプローチの割合を上げていくしかない。そのためにわれわれは、学生個々のレベルに合わせて、苦手な部分を集中矯正するe-ラーニングプログラム「映画英語リスニング・システム」の研究と開発に取り組んでいる。

研究の独自性・アピール点

我々が取り組んでいるのは、TOEICのリスニングスコアが伸びない学習者に対して単に「リスニングが弱いので、リスニングの勉強をしましょう」と漠然と指導するのではなく、学習者に対してリスニングが弱い理由を具体的に指摘し（たとえば「リエゾンと消えるhが他の音素に比べてかなり聞き落とされている」など 図1）、学習（治療）の必要性を納得させた上で、弱点となるその因子を集中的に矯正することにより、リスニング力の向上を図るプログラムである。

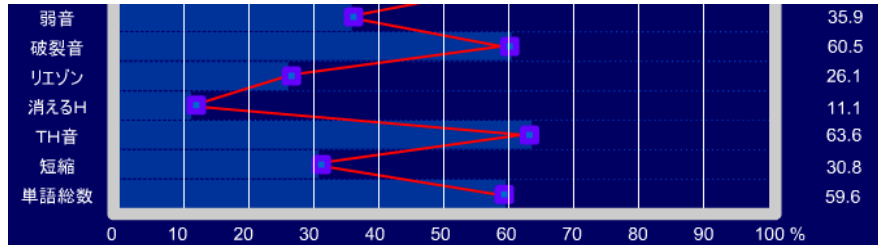


図2 映画英語リスニングシステムの弱点分析の具体例

個々の弱点の分析に基づいて演習を課することで、学習者は学習の必要性を納得することができ、その部分だけを集中的かつ効率的な学習することが可能となる。

期待される成果・波及効果

これまで我が国の英語教育は、このような武器を持たず教員の経験と器量に頼ってきたが、我々が研究を進めるe-ラーニングプログラムを提供できれば、教員は具体的な指標に基づいた学習ルートを学習者に示すことができ、学習者の側も安心して学習に取り組めるようになるはずである。

関連する主な業績

岡崎, 新田 & 木戸, 「オリジナル学習支援プログラム「映画英語リスニング・システム」の実践的運用とその検証」, 『映画英語教育研究』第17号, 21-31, (2012).

Nitta, Okazaki & Klinger, "Speech Rates and a Word Recognition Ratio for Listening Comprehension of Movie," ATEM Bulletin 16, 5-16, (2011).

キーワード

e-ラーニング、持続的・効率的な学習、リスニング